

の病で不帰の客となった。

山中転進の道中で旧知の下士官(尺八の名手の雅人)が路傍に高熱で倒れ、一すくいの水を求められたが、私もこれから先幾山河、自分の命水を与えることも出来ず、後から救援隊がやって来るからと納得させ、その場を去ったが、今思えば不人情なことをやったものだと思われても仕方ない。

聞くところによると、当時バリックパバンで戦った根拠地隊、燃料廠港務部施設隊、生産隊、航空隊や経理部の生存者は約千二百人であるとのこと。

しかし犠牲となった戦友や、戦禍に巻き込まれて身内も家も失ったアジアの国の人々も尊い人柱となった。欧米の四百年に及ぶ植民地支配を打破し、インドネシアの独立をはじめアジア諸国の躍進を見たのも、この解放戦争の余徳と思ひ、末長く平和を維持し榮えて行くことが大切であると思うものである。

戦時を生きた女ひとり

京都府 新宮 美恵子

スーパーの買物を終え、日差し暑い外へ出た時、にわかには鳴りひびくサイレンの音。ハッと気が付き、ああ、今日は終戦の日だったのだ、とうかつさを申し訳なく思い、その場に立ち黙禱を始める。

目を閉じている間、あの当時住んでいた神戸の街の戦時下の光景が、少しずつ色濃く身に迫るように脳裏によみがえってくる。日本は絶対に勝つのだ、勝つまではどんなにしても頑張らねば、と若かった私が固く思った気持ちの裏に、戦況は徐々に不利に傾き、敗戦の色が濃くなっていく不安、そして肉親のいないわが身の心細さ、生活の苦しさ心がさいなむ。

その極限に達した頃ついに戦争は終わり、私の身上に百八十度転換の宿命が待っていて、今、私はこの町にこうして生き長らえ、ここに立っている、とここ

まで思いが及んだときサイレンの音はやみ、目を開ければ真夏の日のふりそそぐ只中であった。

歩き出して考える。身をもって戦争の真つ只中に生きてきた私達にとって、もちろん戦争はあつてはならない、これほど過酷な非道はなく、この世から世界中の戦争を撲滅しなければならぬと思うものの、この辛苦を知らない次代の若者、子供達にはその悲壮な叫びを聞くこともなく、あるいは絵空事であり、全く実感がともなわれない。むしろそのような昔の話を持ち出すのはナンセンスであるかのように捉えられるであろう。

現に私の綾部市の隣りの舞鶴市でも、引揚記念館で「語り部」としてガイドの奉仕をしていた人達も、高齢となりついに解散をすと聞く。時が経つと共に戦争は遠ざかって行く。戦争の記念日も、いつか先では消滅されてしまうかも知れない。しかし、それを放置してはならない。

どうしてそのような戦争が起きたのか、それを国はどのように対処したのか、そのため国民は国を守るべ

くどう尽くしたのか、その結果どうなったか。長い歴史の流れの中で、このたびの第二次大戦はそう長い期間ではなかったかもしれないが、これまでの中で最も熾烈をきわめ過去の勝ち戦と違い、初めて体験する敗戦であった。

この時代に生きた者、大きな犠牲になった人々にとって、これは一生を、あるいは半生を賭けた長く長く、重い戦いであつたと思う。日本を発端とした四年間にわたる戦争がついに世界の大戦となり、多くの人々に大きな爪跡を残したことは、歴史の中に深く残る、忘れてはならぬ不幸であつた。

私の生まれた頃は、明治の二大戦争から時がたち、ようやく国内は落ち着きを取り戻していたが、経済的にはかなり厳しい時代のものであつた。市中の銀行が取り付け騒動にあつたとか、米の相場が不安定とか耳にしたものである。

例年三月十日は「陸軍記念日」で、市中には歩兵が屯し、あちこちで機関銃を空射する重い音が響き、

物々しい雰囲気が街中に漂ったものだった。私の小学校は演習の本部だったらしく、連隊長のような人、きらびやかな肩章を付けた幹部の人達が指令しているのを見ると、兵隊さんの頼もしさよりも、戦争が始まるような恐怖心の方が強かったように思う。私の街の歩兵連隊は、とくに広い砂丘で強歩訓練をするため、強力な歩兵隊として名をはせていた。訓練を終え、へとへとに疲れて砂丘から帰ってくる兵隊達が、声をふり絞って「ここはお国を何百里……」と歌う声と、編上靴で行進する重くも規則正しい足音を夜遅く聞き、子供心にも心暗い哀れを感じたことである。

女学校へ入って間もない頃、私達には理解できないまま、再び支那事変が始まった。子供の頃から、何となく不安を感じ恐れていた戦争である。でも、外地での状況はあまり知らず関心も薄かったが、四年生の時、就職して間のない兄が現役で入隊した。現役と言えば数えの二十歳。今なれば成人式の歳で、「おめでとう」と人々から祝ってもらう幸せな時代。それを當時は否応なく誰もが一律に入隊しなければならなかつ

た。

兄は姉妹の間で育ったのでとても心優しく、いつも笑顔で私をよくかわいがってくれた。中学生の時からカメラが好きで、姉にミノルタベストを買ってもらい、手あたり次第写し回っていた。私もよく被写体となったり、押し入れの中の暗室で現像も手伝われたもので、液の中からフィルムに像が浮かび上がってくる時の兄の喜びは大変なものだった。卒業後はぜひ写真屋になりたいと言い、希望通り姫路の写真館へ就職し、度々いい写真や自身を写したプロマイドのような好青年の写真も送ってくれ私を喜ばせた。

兄の入隊先は故郷鳥取。当時、母と姉と私は父亡きあと綾部の義兄の元で暮らしていたため、鳥取はかなり遠く、面会に行く事も中々かなわなかった。昭和十六年十二月に、日本はついに大東亜戦争に突入。兄は当然応召となり、出征前の数日だけ私等家族に会いに来てくれ、揃って写真を写したのが最後となり、永久の別れとなってしまった。

私の女学校でも戦時下態勢がしかれ、服装は制服の

スカートに代えてもんぺをはき、上履きは藁わらか竹の皮の草履、靴の代わりにげたをはいて通学。農業の授業もあって野菜を作り、蚕飼も実習する。裁縫の時間には、母の着物を染めなおして決戦服を縫い、料理の実習はイモ、カボチャの代用食作り、と学習の内容が変わっていった。

毎月一日は、校旗を掲げた旗手を先頭に氏神に必勝祈願の参拝をし、校庭では分列行進の練習をしたものである。授業をさいて舞鶴の海軍軍需部へ弾丸磨きに、また出征兵士の留守宅に養蚕の手伝い、農繁期には託児所へ勤勞奉仕など、よく協力してきたが、学力もかなり低下したのであろう。

学徒にて弾を磨きしはどこなりし

日かげるレンガ倉庫群仰ぐ

兄の派遣先は北支から中支、南支へと下り、その間は割と筆まめに軍事ハガキや現地での写真をよこしてくれ、私も家族の近況を手紙に書き、慰問袋には武運長久の祈りを込めた千人針や、乏しいながら手作りの食品を入れ戦地へ送った。そのうち女学校を卒業し、

神戸で国民学校の助教を務めていた私には、いつも優しく「自分が好きで選んだ道だから、思い通りしかりやれ」と励ましてくれたり、適齢期だった姉の身の上を案じ、いい結婚をするよう願ったりしてくれた。

その頃、中国における戦闘は、まだしも余り切迫したものではなかったようだ。軍事機密に触れることは書かれていないからそう思えたのかも知れないが、ある日「南支から南方派遣に移るから、当分便りはできない」との知らせがあつてからは、ぶつくりと便りがとぎれた。南方諸島の戦いは目を追って熾烈さを増し、兄の身を案じてただ便りを待つばかりの日々であつた。

私の勤める学校は、神戸市外を少し北に離れた山の麓にあり、学校の近くで一人下宿をしていた。学生時代とは一転して新米の助教員。幸い受持ちは低学年だったので、児童たちは素直に私の言うことを目を輝かして聞いてくれ、冬の冷たい水に霜焼けの手をも厭わず教室を雑巾掛けしたりして私を感動させた。

その頃、街の各所から疎開で転校してくる児童が増

え、教室が足りず、講堂を三つに仕切って授業したものである。音楽の時間は教科書のほかに多くの軍歌を教え、給食の際は皆で手を合わせ「兵隊さん有難う。いただきます」と唱えてから乏しい食事をとったものである。

児童といえ勤労奉仕が義務付けられ、まず固い校庭の土を掘り起こしてイモを植え給食の足しとし、高学年は裏山で薪を作り、ストーブと給食の燃料とした。食べ盛りの児童達は、わずかに代用食の給食があると、は言うものの、皆ひもじい思いをしていた。各家庭ではどうしたであろうか。母親たちの苦勞を思う。

私も同様、乏しい割り当ての配給で飢えをしのぐ。一日に米七勺の配給も日を追って麦が増え、それはまだいい方でしまいに玉ネギ、イモ、カボチャ、大豆の絞り粕と替わる。私の食事の面倒を見てくださった下宿のおばさんは、着物などを農家に持参して、食糧に替えたりももらったようである。でも戦地の兵隊さんは「泥水すすり草を噛み」のように耐え忍んでいられるのだと思えば、ひもじさも精神力で乗り越え

てきたように思う。

この頃の戦況は、まだ日本に有利であった。映画館も健在で、ニュースは日本勝利の華々しい戦闘ばかりを写し、国民の心を戦争へ戦争へとかきたてる事に必死であった。大々的に報じられる標語も

「欲しがりません勝つまでは」

「一億総決起」

「撃ちてしまん」

「鬼畜米英」

などなど。一方、口にする歌はことごとく軍歌で、「天に代わりて不義を討つ……」「勝ってくるぞと勇ましく……」など出征兵士を見送るときは必ず歌い、「暁に祈る」「同期の桜」のように哀調を含んだ歌、「愛国行進曲」「空の神兵」は明るく名曲であった。どこでも一番よく聞いたのは「軍艦マーチ」であろう。映画館のニュースに次ぐドラマも戦時物ばかりで、「かくて神風は吹く」「軍神 山本五十六」「海ゆかば」など、戦いは聖戦であると国民に植え付けた。

日本が敵の空襲を初めて受けたのは神戸であったと聞く。昭和何年だったか定かでないが、その時は一機のみ飛来し、撃ち落されたか故障か、神戸海岸の川崎重工業の前に落ち、操縦士は逮捕されたとか。本土が空襲され始めたのは、それから幾年か後と思う。

神戸の空襲は初め市街地が中心だったので、私達の山手へは流れ弾が時々落下する程度だったし、B29の大編隊が来襲すれば、たちまち近くの基地から高射砲が一斉に火を吹き、夜は探照灯が幾筋も交差して機影を捕らえ、百発百中の状態で敵機を撃墜した。我々は防空壕から身を乗り出し、ひらひらとトンボが落ちるように墜落して行くB29の姿に拍手喝采を送ったものである。しかしそれは長くは続かず、昭和二十年にもなると編隊が街の上空を襲ってきても、もう射撃する弾もなく、敵機は雄々と五十キロ、百キロの爆弾を落下して過ぎ、街のあちこちで火災が発生、すごい爆風で飛ばされ命を落とす人、身ぐるみ火を浴びて焼死する人、川へ飛び込んで溺れる人。まさに修羅の巷であった。

私の学校の近くには軍事病院があり、屋根に大きな赤十字の印がついていたにもかかわらず、敵機はここをも標的にして襲撃してきたため、児童の中にも防空壕にありながら直撃弾で命を落とした子や、エレクトロン焼夷弾の火花で大やけどをした子も出た。私の家の軒にも何本か不発の油脂焼夷弾が突き刺さり、肝を冷やしたこともあった。

ある日、映画を見て帰る途中に空襲警報が発令され、家へはまだ遠く逃れる壕もないので、一人そはの林の中で身をひそめ、爆音の遠ざかるのを待った。夕暮れ方の草むらのどこかで、澄んだ声で鳴いていたマツムシの音色を今も忘れることができない。

休日といえ、まだ若かった私はせめてもの心の慰みにと、繁華街を歩いたり、当時かううじて上映が許されていたドイツ映画『別れの曲』とか、『白鳥の死』などを観賞して感激したり、ある店で「ぜんざい」をやっていると聞けば、遠くとも出かけ、たとえ代用品の小豆でも味はサッカリンでも満足したり、黒豆を焦がしたコーヒーでも口にできるのを幸せと思った。

戦局がいよいよ切迫して来たと思われる頃、東京にとどめを刺すような大空襲が行われた。それから数日後は大阪だった。当時大阪には私の義兄が住んでいたが、大空襲により、市街地がすべて焼土と化したとの報道に、飛んででも行きたかったが電車は停止し、連絡も取れるはずがない。

二日後だったろうか、ようやく開通したのを待って大阪を訪ねた。駅へ降りても建物はことごとく崩れ、どこがどこやら目印もない。幸い地下鉄は通じていたので心齋橋まで行き地上へ出ると、そこは足の踏み場もないほど倒壊した建物のがれきりで道が塞がれ、まだ煙がくすぶっている所、斜めになったレンガの建物、まさにこの世のものとは思えない光景である。

大体の見当で歩いている時、兄の住まいの角にあった石の門柱が一つ残っているのが目にとまった。はっと胸をつかれる思いであたりを見回したが、何一つ手がかりになる物はなく、ここで果てたのか、逃れたのか、家族らはどうしたのか調べるよしもなく、長居をすれば我が身さえ危ないと、心を残しながら引き揚げ

てきた。後の連絡で家族が何とか落ち合って一緒に市中を逃れ、故郷の親戚を頼って行ったと聞き、胸をなでおろした。でもその後、再び疎開した田舎で疲労のためまだ若くして世を去った。

ビルは崩れ焦げし匂い満つこの街に
義兄を探しきただおろおろと

それから数日後、まるで順番が決まっていたかのように、いよいよ神戸の最後の大空襲が始まった。これまで相当痛めつけられたうえ、さらに追い討ちをかけるように、街は壊滅状態となり、家を焼かれ、命からがら黒焦げの衣服に、焼け残りの手回り品を下げて、あてもなくとぼとぼと山手の方へ逃れて来る人達、その列が家の近くを延々と続き、正視に耐えられる姿ではなかった。手を貸すすべもない不甲斐無い自分を恥じ、湧き上がる怒りに身の震えた辛い思いは、今も心にしみこんでいる。

はるか向こうの海岸にある石油タンクの群れは一斉に黒煙を上げ、その煙は空を覆い、その夜はひどい雨となり、一層人々をさいなんだ。

さらに敗戦の色が濃くなると、敵は小型機で市民が集団避難をしている広場などへ低空で急降下し、機銃掃射を浴びせるまでに事態は緊迫してきた。須磨浦公園でも多くの人々が直撃を受けて命を落とした。

ある日、空襲警報のサイレンが鳴るや否や、敵機の爆音が早くも私の学校に近づく。あわやと、児童らに号令して防空頭巾をかぶりながら懸命に走らせ、常に避難している近くのお寺の森へ向かった。しかし、爆音はもう上空近く迫ってくる。機銃掃射を受ければ全員はもうこれまでと、必死の思いで咄嗟に「みんな、溝へ飛び込んで！」「体を伏せて！」と叫び、児童らの姿が頭巾の下にかくれるが早いのか、私も伏せようとしたその時、機はすでに上空を通過。生きた心地はなかった。祈る思いの数秒間だったが、敵は見逃したか、何事もなく去った。溝から這い上がってきた児童らと、互いに身を震わせながら無事を喜びあったが、この時の恐怖と喜びは、子供たちの心にも深く刻み込まれたことであろう。

児童らを溝に伏せしめ銃撃を

逃れし記憶いまでも蘇る

国内の主要都市の大方が空襲で潰滅した頃、街中には流言蜚語が飛び交うようになった。たまに敵機が飛来しても応戦する弾も機もなく市民はただ見送るだけ。そのうち、それらの敵機が超低空でピラを撒き始めた。それには、長い爪をして長く尖った角の生えた西洋の黒鬼が、女、子供に馬乗りになり、上から押さえつけている絵が刷られ、そして、神戸の港から米軍が上陸を開始して、あらゆる婦女子はアメリカへ連行されるそうだと、誠しやかに人々が囁き始めた。女人のまだ若い私にとって、それは死にも価することである。どうしたらいい、誰かに助けてほしい。せめて田舎へ逃れたい。もうひもじい思いもしたくない。と恐怖心と不安が頂点に達した時、あの歴史的な広島の大惨事が起こった。

もう考える余地はない。これまで、と思った頃、思いも及ばなかった人との再会から、その人の紹介で、元住んでいた綾部の近所の人へ嫁がないかとの話になり、先方は農家の事として慣れぬ生活への不安やため

らいも十分あったが、神戸よりは身が安全、食糧も少しはあるだろうし、私には無い家族がいて、相手は海軍の軍属であり、出征することもなく、生計も安定するであろうと誰一人相談する人もないまま、恐ろしい神戸から逃れたい一念でこの結婚に踏み切った。

結果として、その三日後にはついに終戦となり、目の前が暗くなるほどかなり複雑な思いであったが、自分で決めた道、もう後戻りはできず、言い尽くせない辛苦に耐えながら、何とか今の平穩な暮らしにまでこぎつけて来た。

その間、待ちに待った兄の生還はならず、届いた通知はブーゲンビル島で玉碎したとのこと。長かった戦争も終わったとの諦観を持たざるを得なかった。悲しみの中にも、まだ幸せと思つたことは、ひたすらに兄の生還を待っていた母が、戦死の報を知らずに先に逝つたことである。

兄は、青春真っ只中の約五年を、終始して軍隊に籍を置き、乙女の優しさも知らず、触れることもなく、

肉親の愛も世間の人情も分からぬまま、淋しく、苦しく、お国のためと尊い命を捧げて散ってしまった。終戦の混乱期のこととて、兄戦死の詳しい情報はなかなか知れず、尋ねようにもどこが窓口なのかも分からず、もう望みは無いものと半信半疑ながらも諦めかけて三十年ばかり経った。

そんなある日、私は全く天の声としか思えぬような電話を受けた。その人は私の旧姓や住まいを確認してから、おもむろに兄の名を言い、かつての戦友であると名乗られた。兄と戦地で何年か行動を共にした者で、話をしたいことがあまりにも多くあるので、ぜひ会いたい。私は全身が凍りつくかのような衝撃に声が声にならず、何も見えないまでに涙が溢れ、どうして私を探し当てて下さったか、かろうじてお尋ねすることが出来た。

古い戸籍はもう郷里の市役所の地下室に収められ、肉親でさえ閲覧が許されぬのを、繰り返し足を運び事情を詳しく話して遂に説き伏せ、妹である私の移転先を次々と調べ、終いに神戸からこの綾部に嫁いでいる

ことを突き止め、電話番号さえ苦勞して調べて下さったらしい。その話を最も聞きたい姉は病に臥していたため、その数日後、ちょうど故郷鳥取へ帰る用事が出来たのを機に、あるお寺でお目にかかることになった。

約束の時間、私は身の震える思いで門に立ち、訪ねて下さる戦友を待った。車が止まり、二人の方が私を指して歩いて来られる姿に、兄との再会のような気がして思わず駆け寄った。

お寺の一室で、二人の戦友は中支、南支で兄と共に写した写真を何枚か下さり、知る限りの兄の様子を話して下さった。私はこの貴重なお話を病む姉にも聞かせたく、お許しを得てテープに録音した。寒さに弱い兄が凍りつく戦地で貧しい食事の炊事当番をしたり、銃撃に出ていた話に胸は痛んだ。戦友は、兄が南方派遣となつて別れるまで一緒で、以後の消息はご存じでなかった。

兄の戦死を知る只一人の戦友の

います因州河原へ向ふ

そこへまた、思いがけない知らせがあった。ブーゲンビル島は全員玉碎とのことだったが、奇跡的に生還された人があり、所属は別だが兄と同じ月部隊の中隊長で、九死に一生を得たブーゲンビルの生々しい実戦を綴った『飢餓と弾雨』という本を自費出版され、私と姉に送って下さったのである。その末尾の戦死者名簿には、まさしく兄の名が、一級昇進して記載されていた。

その後、月部隊の生存者の方の赤心から、慰霊碑が建立される話が持ち上がり、あちこち場所を物色されたが難しく、ようやく姫路の護国神社境内に決まり、除幕式には私達姉妹もお招きいただき、執筆をされた元中隊長にも紹介された。いよいよ兄の戦死が確実なものとなり、心に一区切りをつけるためもあり、兄の御前慰霊祭を執り行い、戦友もお参り下さった。こうして兄を親先祖と共に祭る事になったが、一度靖国神社へもぜひ参拝したいと、何年か後に思いを遂げる事が出来て安堵した。

菊花紋の幕張る宮に伏して悲し

ブーゲンビルに兄は還らず

第二次世界大戦が終わり、一応世の中は落ち着いたかのように見え、世界各国もそれぞれ平和を掲げて努力してはいるが、一部ではまだ戦争の根が絶えず、次々と問題が浮かび上がり収まる所を知らない。でも為政者は過去の独裁を反省し人々の大いなる声を聞きながら、しっかりと国民を指導して欲しいものである。かの戦争で多くの人がお国のためにと尊い命を捧げ、他の国民も大きな犠牲を払い、必死で戦い抜いてきた貴重な体験を、どうか後世に伝え残し、より平和な世界に繋がっていく事を切に願ってやまない。

戦後の五十余年

悲しみを越えて

福島県 芳賀 恵 子

戦争は残酷でありました。時がたっても忘れられること
はできないものです。

終戦五十周年を越え、往時をしのび感慨がこみ上げ
るものがあります。夫が入隊し、遺骨が帰るまでを回
想し、歌をかき綴ったものであります。

村松連隊へ入隊

今日よりは 願みなく大君の

しこのみ楯と いでたつわれは

「今日からは死せるものと思つて下さい」。決意の
言葉を残して、夫は昭和十七年九月五日、新潟県村松
の歩兵第五十八連隊に補充兵として入隊しました。

当時、夫も私も村の小学校の教師をしていました。

家族は、九十二歳の祖父と義父（六十五歳）、義母
（六十四歳）、甥（十一歳）そして一年七カ月の長男の
七人暮らしでした。

夫は誠実沈着、責任感の強い人でありました。ま
た、思いやりのある心のやさしい人で、貧しい児童に
は昼食や学用品はもちろん、衣類などもよく与えてい
ました。音楽や体育を得意とし、学芸会や運動会をは
じめ、若手の教員として学校ではなくてはならない存
在でありました。南支で日語学校の教鞭をとり、学芸